

太宰府の文化財

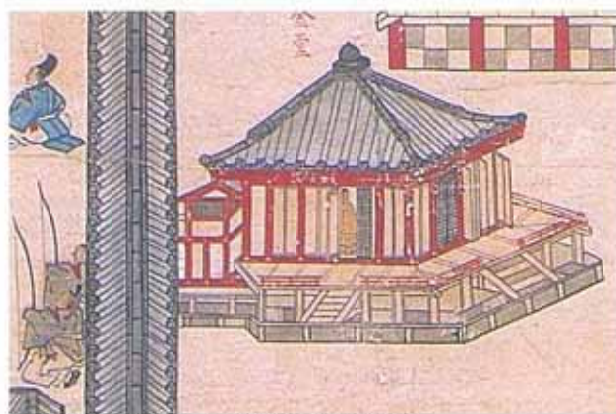
観世音寺金堂の発掘調査

(211)

所在 観世音寺五丁目



▲現金堂の西側部分の発掘調査状況（写真提供：九州歴史資料館）



▲観世音寺絵図に描かれた金堂の部分
（写真提供：九州歴史資料館）

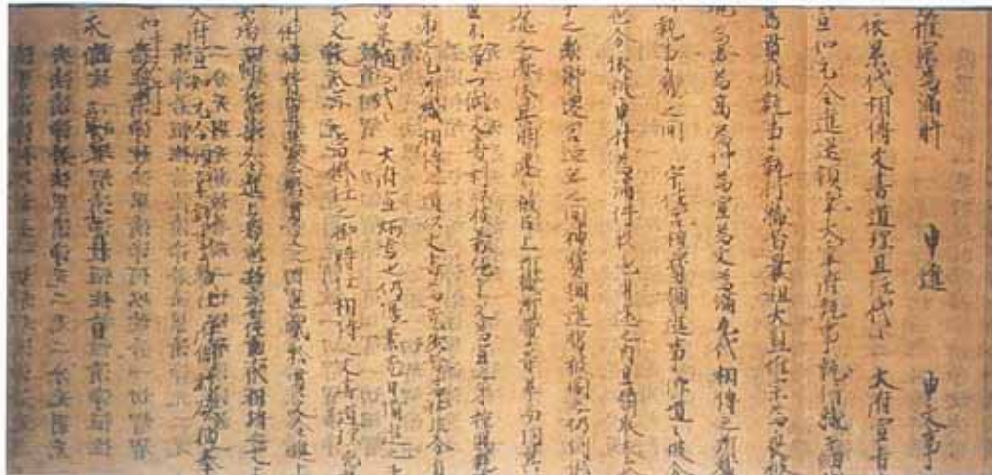
創建当時の観世音寺の金堂の規模を確認する発掘調査が行われ、11月初めまでに分かったことは以下のことです。現金堂の西側に拡張された基壇が見つかり、その下から焼けた土が出てきました。火事か何か、ひどく焼けたことを表しています。そこで記録を調べると、平安時代の終わりの康治二年（1143）に観世音寺の金堂と回廊が焼けたという記事がありました。や

鎌倉時代に書かれた『百練抄』によると「康治二年六月廿一日夜、観世音寺堂塔廻廊焼亡」とあり『東大寺文書』久安四年（1148）の「筑前国観世音寺堂舎損色注文」にはもう少し詳しく「金堂一字、焼失」「西南廻廊卅三間、掃地焼失」と書かれています。どうもこの記事に符合する火事の跡ではないかと考えられています。

そしてもう一つ、焼土層の下に、金堂基壇より一段下がって西に張り出した基壇がありました。詳しいことは、12月まで続く発掘を待たねばなりません。観世音寺に残る絵図の内容からとても興味が持たれています。というのは、室町時代の大永6年（1526）に描かれたという境内図の金堂の部分に、上の絵図のように、金堂本体とは別に西側に、しかも基壇が一段下がって小さな建物が附設されています。これに合う基壇跡ではないかということなのです。

また、逆に一段下がった基壇が出土すれば、それは康治の火事以前の造成なので、その基壇上の建物も康治二年以前の建物ということになります。すると、絵図の金堂は康治二年以前の様子を表しているということになって、この絵図がいつごろの観世音寺の様子を描いたものなのか、少なくとも金堂に関しては平安時代末以前の状態を表しているのではないかなど、いろいろ興味深いことが出てきます。ところでこの附属施設は何なのか？ 閤（か）棚（たな）といって仏様に供える水や花などを置く棚ではないかという説もあります。閤棚は鎌倉時代ごろから作られる施設なので、平安時代末の焼失以前の状態を表している図にはふさわしくないのです。これは違う用途の建物と考えたほうが良いという意見もあるそうです。

ご興味のある方は観世音寺の発掘現場をのぞいてください。



太宰府の文化財 213

惟宗為満解

永仁2年(1294)
熊野神社所蔵

写真①の文書は若狭国、現在の福井県遠敷郡名田庄村にある熊野神社に伝わる大般若經の裏に書かれているもの(紙背文書)で、内容は太宰府の大監であった惟宗為満が上役に提出した文書です。その文書がなぜ太宰府と縁も縁もない(と思われる)若狭の一神社に伝わったのでしょうか。

まずお経に使われた文書はこれ以外にも50数通あり、内容から特定の貴族の家・中御門経任・為方父子に伝わったものと考えられています。経任は文永8年(1271)10年、弘安6年(1283)永仁3年(1295)、為方は正安2年(1300)嘉元元年(1303)まで大宰権帥でしたので、その関係で太宰府からの文書も持っていたのでしょう。それら文書群がある時点で反故となり、それを継ぎはぎして経文の印刷に利用したと考えられます。昔は紙が貴重でしたから、廃棄した文書などの裏を再利用したのです。ですから初めに大般若經の裏に書かれている文書ですといいましたが、本来は逆で、そもそもは大宰府の文書が表で、その裏を再利用したのがお経だったのです。

文書と経巻の関係は以上ですが、それがなぜ若狭なのかは、よくわかっていません。中御門家と熊野社がある地域とは直接の関係はなさそうです。この大般若經600巻は一度に作られたものではなく、寄せ集めて600巻にし奉納されたものらしいので、その中にたまたま都あたりで反故の文書を利用して木版刷りした経文が混じっていたのかもしれない。でもおもしろいですよね。太宰府で書かれた文書が都へ送られ、そしてもう一働きして若狭まで旅をし、約700年後の現代まで残っていたなんて。

さて文書の内容ですが、大宰大監だと思われる惟宗為満が、代々相伝してきた太宰府執事職を、些細なトラブルから辞めさせられた際に乗じて、惟宗為祐が手に入れたが、自分こそが正当な後継者なので、執事職に戻してほしいと訴えているという内容です。執事職について詳しくは不明ですが、太宰府が管理している地域の寺や神社に関する事務・実務を行う係の長であったようです。この文書でも為満は執事職として宇佐宮の神宝調達に従事していますし、寺社の造営や仏神事に携わる職として執事が出てきます。

この文書を詳しく知りたい方は昨年発刊の『太宰府市史 中世資料編』をご覧ください。

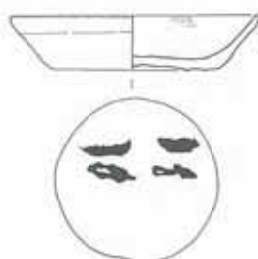
(熊古都太宰府保存協会)

太宰府の文化財

214

人面墨書土器

平安時代・鎌倉時代
学校院・観世音寺地区出土

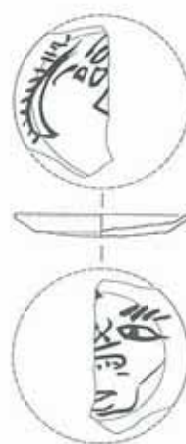


▲人面墨書の坏 (写真①)
観世音寺地区出土 土師器
鎌倉時代
口径12.3cm 器高2.8cm



▲人面墨書の皿 (写真②)
学校院地区出土 土師器
平安時代 (12世紀前半)
口径8.8cm 器高1.2cm

人の顔が描かれているように見えませんか。これらはお皿の形をした土器（坏）の底の内側や裏側に墨で描かれているものです。
このように浅い坏ではなくて、深さがある壺の側面に顔が描かれているものもあります。そしてこれらの多くが溝や川の跡から見つかるといのも特徴です。何のためにお皿や壺に人の顔を描いたのでしょうか。



内側

外側

▲人面墨書の皿 (写真③)
学校院地区出土 土師器
平安時代 (11世紀後半)
口径9.0cm 器高1.2cm

(写真・図提供：九州歴史資料館)

これは昔の人のまじないの道具なのです。今のように薬やお医者さんが身近に居る時代ではないので、病氣や怪我は生死に係わる重大なことでした。それは体の中に溜まった穢れが原因で起こると考えられていたので、その穢れを外にはき出して、何かに封じ込め、よその世界に流し去れば病は回復し、または病氣に罹らないと信じられたのです。その穢れを封じ込める道具の一つがこれら人面墨書土器でした。これらに息（穢れ）を吹き込み、封をして、別の世界へ流し去ってくれる流れがある川や溝に投げ込んだのだろうと考えられています。

人面墨書土器は奈良時代の後半くらいから使われるよう

になり、はじめは民間信仰というよりは、公的な儀式として行われていたようで、平安時代の出土例の大半が役所や役所の隣接地からだそうです。写真②③の土器も学校院跡の溝の跡から見つかっています。古い時代は疫病神を表わしているような怖い顔が描かれることが多かったのですが、写真のものはユーモラスな表情さえ見せるものに変わっています。

どんな穢れを吹き込んで流したのでしょいか。

さてこれらの土器は現在、九州歴史資料館で見ることができます。企画展「大宰府へ、こころが動き、ものが動く」会期3月9日(日)までです。

(財)古都大宰府保存協会

太宰府の文化財

(215)

呪符墨書の土師器

今回も祓えやまじないの道具です。

写真の壺をご覧ください。文字のような、あるいは記号のようなものが墨で書かれています。これは一体何でしょう。

この文字や記号は古いやお

祓いのための呪文なのです。

前号でもお話ししましたが、科学が未発達な時代は人間界や自然界で起きる現象は、人間の力ではコントロールできない神や魔物の仕業と考えていました。特に天変地異は神の怒り、病気は疫病神が活動

しているせいということで、それを慰め、鎮めようと祀りをし、祈りました。また病気や災害から免れようとするばかりでなく、より幸せになるように、少しでも長く生きられるようになどなど、いろいろなことを願って祈ったり、占ったりしました。その時使う道具がいろいろありましたし、祈願の内容によって使うものを変えたとも考えられます。

さて前号は人の顔が書かれた皿でしたが、今回は呪符や呪文の文字が墨書されています。図の呪符釈文を見ていただくとわかるように、漢字や漢字のようで漢字ではない独特の呪字、記号が並べられています。各呪文の最後に書かれた「急々如律(律)令」

は「すみやかに事が進み、願いがかないますように」という意味ですが、他の呪文の意味するところはよくわかっていません。

ただ、「咄吠置(咄)」と書かれた呪符は「疫病(疫神)除け」用ではないかという説もあります。

このような呪符は中国の道教の影響が強いと考えられ、それが神祇や仏教、陰陽道や修験道などとも混ざり合っており、広まっていたと思われます。呪符の壺の方は修験道に関係したものではないかとも言われており、同じ遺跡からは木札に墨書された呪符も見つかっています。このように呪符は木札、土器そして多分、紙に書かれたものもあつただろうと考えられています。

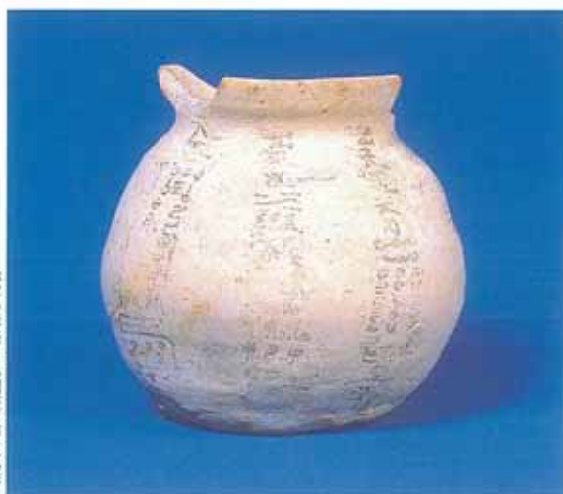
▲呪符釈文(一部分)

(福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集」から)

最後に「急々如律令、律令の如く急げ」とは、律令とは

呪符も除災招福、病氣平癒くらいならいいのですが、人を誣ったり、夫婦離別の呪句など、おどろおどろしいものもあるようです。

(開古都太宰府保存協会)



(写真提供：九州歴史資料館)

▲呪符墨書の土師器壺
御笠川南条坊遺跡(朱雀一丁目・国道3号下)出土
平安時代末期
高さ約9cm
胴部径約10cm



(写真提供：九州歴史資料館)

▲「急々如律令」銘の土師器皿
大宰府史跡119次(観世音寺五丁目)出土
鎌倉時代
口径8.9cm 器高13cm



▲今川了俊一座千句連歌 第五・百韻の連歌懷紙
縦16.3cm 横47.8cm 太宰府天満宮所蔵

太宰府の文化財 (216)

今川了俊^{いまがわりょうしゅん}一座千句連歌 第五・百韻^{ひゃくいん}の連歌懷紙

今から約620年前の南北朝時代に九州探題であった今川了俊が天満宮安楽寺(太宰府天満宮)で会を催し、奉納したと思われる連歌の懷紙です。

連歌とは和歌から派生し、五七五の上句(長句)と七七の下句(短句)を交互に続けていく詩歌の形態で、作者も一人ではなく複数の人が集まって交替で詠んでいきます。百句(百韻という)を普通基本形式にしていますが、五十句や三十六句などの短いもの、百韻を十回重ねる千句、千句を十回の万句という規模の大きな連歌も行われました。連歌は鎌倉時代から南北朝・室町時代に盛んでしたが、江戸時代になつて連歌の発句五七五を独立させた俳諧が文芸として確立すると、連歌の意義は失われていきます。ただ、特定の神社では神仏を供養するために奉納する法楽の連歌として続けられました。

さてこの今川了俊の連歌懷紙ですが、現在は太宰府天満

宮に所蔵されていますが、以前は静岡の方が持っていて、この懷紙自体に会が興行された所が書かれていないので、どこで行われたかはつきりしませんが、次のようなことから、恐らく太宰府天満宮安楽寺で興行されたとみて間違いないだろうと言われています。

懷紙の端に永徳二年正月二十二日の記載があるので、五番目の百句が詠まれた日がわかります。このころの了俊は、前年の6月に肥後で菊池氏の本拠を陥し、その後肥前や筑前の武士に文書を出し、永徳二年二月には安楽寺領を保護するよう命じているので、この辺りにいた可能性は大です。連歌会の参加者(連衆)に、快歌^{かいが}という天満宮の文書に残る僧侶と同一人物かと思われる人や、他にも信誓^{しんせい}、仙賀^{せんが}など天満宮安楽寺の僧や関係者と想像される名前があります。また博多や大宰府の時衆^{ときしゅ}(時宗僧)と思われる人たちの名も何人か見えます。

そして了俊の発句(最初の句)も「今日いか我此花の御かき守」で、此花が梅の花を指し、その番人を任じた内容になっていて、これは梅花↓天神様↓天満宮安楽寺の警護役を誓った歌と言われています。

期日についても、千句の連歌を詠むのは一日ではできないので、日数が三日とか五日とかかかります。それを考慮すると、千句を詠み終えるのを天神の命日二十五日に合わせたとしても無理はなく、天満宮に縁が深いと思われます。今川了俊は九州探題として九州経営が円滑に進むよう天神に祈るとともに、天満宮安楽寺の保護者を任ずることで、九州の中で大きな影響力を持つ天満宮を通して実質的にも支配が進むよう考えての連歌興行だったのでしょう。優雅な懷紙から、文芸も信仰も現実の社会とは無関係でいられなかったことが見えてきます。

(財)古都大宰府保存協会

太宰府の文化財

(217)

観世音寺講堂の聯

江戸時代 観世音寺

観世音寺の講堂をのぞくと
仏様（聖観音立像）が納めら
れた厨子の両脇の柱に長い聯
が掛かっています。

た風習で、お正月用（春聯）、
名勝や古跡をたたえる聯など
いろんな種類があります。

聯というのは以前にもお話
しましたが、柱や壁、門や塀
などの左右に對にして掛け、
飾りにした細長い書画の板や
紙のことです。中国で始まっ

書かれる文字の数は5文字、
7文字を主とし、2枚つまり
2句で一組の表現なので、両
句は同じ字数そして意味や語
法も對になるように作らなけ
ればならないさまりです。



▲観世音寺講堂内（厨子の左右の柱に聯が掛かっています）

観世音寺の聯は写真①②の
ように書かれています。①②

が對であると同時に、それぞ
れに書かれた7文字、5文字
の2行が各々對句になってい
ます。例えば①の7文字の方
は、「扶桑果日」と「蓬萊瑞氣」、
「出東方」と「充西土」です。

扶桑というのは東海の日の出
る所という意から日本国を指
し、果は日光の明らかなさま、
蓬萊は東海中にあつて不老不
死の地とされる伝説上の靈山
です。5文字の方も山と海が
對句になって、寿の言葉が並
んでいます。

②には観世音寺の建立が天
智天皇に始まることや、沙弥
満誓の万葉集、菅公の漢詩の
ことが對句で書かれています。

この聯を書いたのは京都の
大徳寺の前管長で崇福寺の当
時の住職であつた質休宗文と
いうお坊さんです。現在は裏
面が見れないので詳細はわか
りませんが、記録によると
「元禄元年」（1688）の銘
があるそうで、これが作られ
た年がわかります。また②に
は福岡藩主黒田光之が講堂を
再建したことが記され、別に
残る棟札にも元禄元年の黒田
光之による講堂の再興が記録
されているので、この聯は講
堂再建に伴って掛けられたも
のであることがわかります。

さて質休宗文は前述したよ
うに臨濟宗大徳寺の第二三九
世で博多崇福寺の八一代の住
職を勤めた人です。禪宗のお

坊さんが書いたものがどうし
て天台宗の観世音寺にあるの
か、考えられる理由を推定し
てみました。講堂の再建者は
黒田光之。黒田光之の側近の
中に立花実山という、質休の
次に崇福寺住持になった古外
宗少を参禅の師とする人がい
る。また実山は質休の勧めに
より小堀遠州所持の瀬戸茶碗
を入手していることなど、実
山と禅僧たちの交遊、そして
光之の寵臣という関係などが
ら、質休の書いた聯が観世音
寺講堂の再興の祝いに贈られ
たのではないかと思うのです。

聯の裏面の調査などが進む
ともう少し詳しいことがわか
るかもしれません。

（財）古部太宰府保存協会



▲②（左側の聯） ▲①（右側の聯）

太宰府の文化財

(218)

漆の器

おせち料理を詰めた重箱、美しい蒔絵が施された屠蘇容器に朱の盃、たつぷりした大きなお雑煮の椀、お正月はいろいろな漆塗の器が並びます。汁椀やお箸など日常でも使っていたりしてやるでしょう。

では、漆塗の漆とはどんなものでしょうか。漆はウルシノキの樹液を採取して作ります。ウルシノキの樹液はウルシオールという主成分とラッカーゼという酵素、ゴム質、水分等から出来ています。このウルシオールがラッカーゼの働きで空気中の酸素によって酸化され固まって、硬い膜になるのです。この膜は熱や塩分、酸・アルカリにも強く、防腐蚀性や絶縁性もあります。その優れた性質に気づいた人間は、大変古くから漆を利用



▲五条二丁目(西鉄五条駅前広場)出土の漆椀 (外面)

鎌倉時代 プナ材

高台(底部)径 5.5cm

用しました。平成12年には北海道で9000年前の漆を使った品物が見つかっています。縄文時代には櫛や飾弓、鉢、柄杓、竹を編んだ藍胎の容器、壺形の土器などに漆を塗って使います。弥生時代の遺跡からは漆塗の飾り板や装身具が出土しました。古墳には漆塗の革製の盾や武器類、棺が納められ、仏教伝来とともに、仏像や寺の建物、それを飾る調度などに漆が使われ、その技術も飛躍的に発展しました。漆は接着剤としても利用され、石器時代には石鏃を木の柄に付けるのに、また、仏像やお堂の柱を金色に輝かすために金箔を漆で貼り付けます。この漆の接着作用を利用して

いるのは、人間ばかりではなく、足長蜂は巣を木や軒下にくつつける時、この漆を使っているのだそうです。他に漆は錆防止のために鉄製品に塗られます。現在でも南部鉄製品には漆が焼き付けられ、錆を防ぐとともに、美しい光沢を醸し出しています。さて、今回取り上げた漆塗の器は鎌倉時代の製品で、市内の発掘調査によって見つかったものです。鎌倉時代ごろになると、漆塗の椀や皿の食器類が庶民の間でも使われるようになっていくようです。各地の中世遺跡から漆器類が出土しますが、共通する文様や作り方が見られ、ある程度、量産されたのではないかと考えられています。市内で出土したものも、轆轤を使つて木地(漆を塗る母胎となる素地)を作り、その上に炭粉を柿渋に混ぜた物を塗り、上に透明漆をかけています。朱色は硫化水銀(辰砂)の粉を



▲五条四丁目(鉾ノ浦遺跡)出土の漆椀

鎌倉時代 カヤ材

高台(底部)径 8.3cm

漆に混ぜて朱色を作り、それで文様を描きました。このような轆轤で木地を挽き、安価で大量に供給が可能な柿渋と炭粉で下地を作つて漆で仕上げるという方法は平安時代の末くらいから近年まで、普段使いの漆器の作り方として行われていました。市内で出土したこれらの漆器類も当時の日本の漆芸技術の流れの中で押さえられることが分かります。

(財)古都太宰府保存協会
これらの器は、次の展覧会で見るができます。

「埋もれていた太宰府の歴史」展
期間 6月28日(土)～8月31日(日)
場所 文化ふれあい館

太宰府の文化財

(219)

陶器の大甕おがめ

鎌倉時代 観世音寺一丁目出土

写真の焼き物は、大甕の上半
分くらいにあたる部分です。中
国から輸入された陶器で、戒壇
院の前、県道をはさんで向い
側を発掘調査した時に出土し
たものです。



▲甕（口径81.2cm、器高（高さ）は120cm程度と推定される）

参考



※全体の形はこのようなものであったと考えられます。

ここからはたくさんさんの中国産の陶磁器、特に今回取り上げた陶器製の甕や鉢、甕類がいろいろ出土して、大変興味深い所です。ここでの出土品については折々にお話ししたいと思いますが、まずは大きな甕から。

これらの甕は前述したように陶器製です。陶器とは粘土を原料とし、釉（うす）がかかれ、少し吸水性があり、硬さもやや軟らかい焼き物です。参考までに今、私たちが普通に使っている食器類のほとんどは石の粉末を使い、吸水性がほとんどない硬い焼き物、磁器の製品です。陶

器はそれに比べると軟らかく、ざっくりした感じですよ。

さて、日本で磁器が焼かれるようになるのは江戸時代近くになってからです。それまでは磁器の製品は中国や朝鮮半島から輸入しなければなりません。しかし陶器は日本でも奈良・平安時代から生産されていて、技術の差はあれ、磁器のように貴重品として輸入される必要はなかったと思われ。しかし、その中国製の陶器がかなり日本に入ってきており、しかも輸入港の博多・大宰府、大消費地の平安京ばかりでなく、東北の平泉など輸入港から遠い地域にまでその出土が確認されることから、これらの中国陶器はこれそのものを商品として輸入したのではなく、この中に納められていた物が商品あるいは必要な物で、これらの陶器は今では荷物運搬用のダンボール箱として使われたものではないかと考えられています。しかしこれ自体も利用できるもの

ですから、中味を取り出した後、いろんなものに使われたと考えられます。そのためか博多周辺では、国産の陶器類の需要は少なく、国産品が本格的に入ってくるのは鎌倉時代以降だったそうです。

ところで、写真の大甕にはどんなものが入られて運ばれてきたのでしょうか。中味が確認されたものはないのですが、そのころの輸入品から想像してみましよう。

まず香料や染料、薬などがあります。錦や綾の絹織物、書籍や経典なども輸入しています。穀類や豆類の食料だったかも知れません。航海中の食料でもあり、また商品として港に降ろしたかも知れません。重量があるものはこんな大甕にいつぱい入れると運べなかったでしょうが、軽くて、かさばるものなどが納められたのではないのでしょうか。

一体どんなものが入れられて海を渡って来たのでしょうか。

（財）太宰府保存協会

太宰府の文化財

(220)

太宰管内志・太宰府徴

伊藤常足著

江戸時代

江戸時代の太宰府地域を記

述したものは『筑前国統風

土記』『筑前国統風土記附録』

『筑前国統風土記拾遺』とい

う3部の地誌がよく知られて

いますが、今回は伊藤常足と

いう人が一人で編集した『太

宰管内志』『太宰府徴』につ

いて紹介します。

『太宰管内志』は名のお

り、大宰（府）管内すなわち

古代の役所太宰府が管轄した

九州全域と壱岐・対馬につい

て、古代から常足の時代まで

に書かれた書物の記事を抜き

出して地域別に編集した史料



▲太宰管内志（1頁目）



（写真提供…九州歴史資料館）

▲太宰府徴草稿 下巻（右=表紙、左=1頁目）

あるそうです。それにしてもよくこれだけの資料を集めたものです。現代のように見たい本が書店や図書館で手に入るような時代ではないので、資料を持ってる人から借りて写さなければなりません。借りるのも大変です。郵便制度も未熟ですし、

集です。総計82巻から成り、筑前国26巻・日向国4巻・薩摩国3巻というように国によって資料収集の度合が異なるようですが、一個人が九州全体にわたる地誌を作ろうとしたことは驚嘆すべきことです。常足が引用した資料はよく知られた書物ばかりでなく、旧家の文書や系図、神社仏閣に残る銘文、言い伝えなども取り上げ、またその範囲は日本だけでなく中国の書籍にまで及ぶなど全部で337部もあるそうです。

交通通信事情も現代と格段の差です。常足は現在の鞍手町に住んでいましたので、一層、大変だったと思います。借りた資料はコピー機があるわけではないので、一つ一つ手で書きしなければなりません。本当に気が遠くなるような収集作業です。実際に現地を歩いて採集した所もあり、38年の歳月をかけて作り上げたということがうなずけます。

『太宰府徴』3巻と副本1巻は『太宰管内志』に詳しく載せることができなかった太宰府の史料集です。この本は推古天皇（7世紀初め）から醍醐天皇（10世紀半ば）までの300年間の出来事を、神祇とか災異、仏法、歌部など12の項目別に分類しています。



▲伊藤常足肖像画

使った資料は「古事記」「日本書紀」などの六国史、「延喜式」「万葉集」「菅家後集」など、いろいろです。

最後に、常足の経歴を。彼は江戸時代後期の安永3年（1774）に鞍手郡古物神社の神官の家に生まれ、儒学を亀井南冥に、国学を青柳種信に学び、中央の学者とも親交を持ちました。志摩の桜井神社には神道の書籍を集めた文庫と国学や神道を教える学館を作って教えるに行き、ほかに鞍手郡内はもちろん遠賀郡や下関にまで教授所を設け、国学や漢学、和歌などを指導してまわりました。85歳で亡くなるまで神職に学問にまた教育者として、ひたむきな生涯でした。そのまじめさは常足の筆跡（写真参照）からもうかがい知ることができます。

これらの文書は九州歴史資料館の特別展「大宰府へ、ひとが動き、ものが動く」（11月3日（月）まで）で見ることができます。

（財）古部大宰府保存協会